

# 学内広報

2021.6.24

no.1547



5月23日、東京六大学野球リーグ対法大戦で勝利した硬式野球部



志ある卓越。



東京大学  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

海外出身の構成員から見た  
コロナ禍の日本と東大

藤井総長就任記者会見・質疑応答集

岩村理事に聞く、東大の目指すCXの姿



# 世界の目に映る コロナ禍vs東大・日本

海外から来た  
教職員・留学生  
に聞いてみた

①コロナ禍の下での大学生活で困ったことは？ ②東大のコロナ対応で不満な点、満足な点は？ ③日本と母国のコロナ対応を比べてどうですか？ ④コロナ禍の日本で「ヘンだ」と感じることは？ ⑤コロナ禍に関して大学に言いたいことは？

コロナ禍が世界に、日本に広がって早や1年数ヶ月。この間、日本の社会も東京大学も、コロナ禍の試練にさらされてきました。オンライン授業や在宅勤務が日常的なものとなってキャンパスの風景は一変しましたが、「密」な満員電車は相変わらず……。そんな日本社会の様子や東大の舵取りは、グローバルな目にはどのように映るでしょうか。そこで今回、東大で活動している海外出身の仲間10人にお声がけし、コロナ禍下の大学生活や社会観察についてメールアンケートを実施しました。地に足の着いた生活者の目線、冷静に状況を捉え、問題点を見出す研究者の目線——なるほどと思う見方、ハッとさせられる声をお届けします。

## 日本は効率的な国という評価は幻だったかな？

①教員側や学生側を問わず、対面授業と比べてオンライン授業で刺激や楽しさがかなり削がれている気がします。研究面でも、共同研究はオンラインでももちろん十分可能であるものの、共同研究者と同じ空気を吸わないとインスピレーションがなかなか湧いてきません。②直ちに授業をオンラインに切り替える判断をし、教職員全員が新しい仕組みに積極的に取り組んで、全力を尽くして実行したことは高く評価しています。③ベルギーの政治は相変わらず大力オスですが、なんと、ワクチン接種は非常に効率良く実施されていることに少し驚きました。日本は、ベルギーなどでずっと効率的な国と評価されてきましたが、それは幻だったかな？④日本での生活が長いので今更何かに大変驚くことはまずないと思いますが、「この企画は明らかに不可能だ、コロナ禍で避けるべきだ」とみんな思っている、その事実を認める責任者が全く現れないという悪い癖がいつまで続くのでしょうか。⑤「オンラインで大丈夫じゃないか」と思わないでほしい。教育のため、また研究のために。

ベルギー

数理学研究科教授  
Ralph Willox さん



## 世界と日本との「時差」が今後際立つかも

①オンライン授業では人間関係を築きにくい上、討論の相手の顔が見えないのは疎外感が増し、つらいと感じます。相談施設に問い合わせても返事が来ない時もあったので、対応を確認し続ける必要がありました。②PC・ルーターの貸出やオンライン受講のための教室開放はよかったです。Wifi環境の弱さや図書館・院生室の利用時間の短縮は不便な点。③ブルガリアでは、コロナ対策は「新しい生活様式」に慣れるためではなく「異常な生活様式」の克服のためであると理解されていますが、日本はそれと逆で、異常な状態を日常化してしまっているように感じます。④「自粛」「不急不要の外出」など意味不明な言葉で対策が行なわれるのは変ですね。政府→自治体→組織→個人の順で最終的に自己判断・自己責任に委ねられていて、その状況を社会が疑問なく受け入れているのも不思議です。⑤動き始めた世界と緊急事態宣言を延長した日本との「時差」が際立ちそう。大学だけでも（というより、大学だからこそ）今の状況に慣れてほしくないです。

総合文化研究科修士課程

ブルガリア Viktoriya Nikolova さん



## PCRなどの検査を大学に提供してほしい

①私の仕事の多くはリモートでできるので、職場から家への切り替えは簡単でした。在宅勤務の方が生産性が高く、心身の健康にも有効です。そのかわり電気代など自己負担の経費がかかるので、カバーしてもらえるとよいのですが。②職場で働く必要があるとき、症状に疑いがあるとき、同僚の陽性が判明したときなどには、PCR検査や抗体検査を大学に提供してほしいです。③マスクに抵抗がなく、公共の場での物理的接触（抱擁、握手など）の少ない日本の文化が感染を軽減したはず。ただ、日本も英国も人より経済を重視したように見えました。④五輪への執着と、リモートワークに熱心でない雰囲気もあったことは疑問。コロナ禍は他国より遅かったのでニュージーランドのように対応に成功した国から学べたはずが、実際は対応に失敗した国々と同じことになってしまったようです。長期的戦略を欠いたのでは？⑤大学でワクチンの接種と開発を進め、有効性と信頼性を実証していくとよいと思います。

広報戦略本部特任専門員

イギリス

Rohan Mehra さん



## 日本人の慎重さのプラス面とマイナス面

①論文提出前最後のデータを取得する頃にコロナ禍が発生し、先が見えない状況で研究を続けるのは非常に大変でした。②研究への影響に鑑みれば、大学は費用をかけてでも定期的な検査を提供できたはずだと思います。研究者や学生には、病気だけでなく、自分が感染して研究室閉鎖の要因になるのを恐れる人もおり、そのストレスの軽減策もあるべきです。大学と研究主宰者（PI）が早い段階から密に連絡をくれたのは重要でした。③日本人は当初から状況を理解し、ウイルス拡散防止にはマスクの着用が重要だとわかっていたし、諸外国と違い、政府が罰則付きで命令しなくても人々は集まるのを避けていました。一方、トルコでは検査を無料で提供しており、日本もそうしてほしいですね。④感染が増えた時期でさえ電車では社会的距離が保たなかったこと。⑤日本人は少し慎重すぎると感じていましたが、今回はこれが蔓延を防ぐ肝でした。ワクチンに対しても慎重なようですが、もし日本が最初から迅速に開発を進めていたら、世界は最も信頼できるワクチンを手に入れていたでしょう。

ニューロインテリジェンス国際研究機構

トルコ

特任助教 Ucar Hasan さん



## 研究は不便でも日常はそれほど変わりません

①私の研究は沖縄でのフィールドワークが主体のため、移動制限で大きな影響を受けました。オンライン授業では他の学生と直接話せず、仲間とつながるのが難しいです。家族を訪ね、ダンスに通い、映画館に行くといった生活が当然ではなくなりました。②躊躇せず授業をオンライン化し、活動制限レベルを制御したのは英断。健康管理フォームや入口のIDスキャナーなど、感染者の追跡に役立つ対策もよかったです。③市民の意識の高さ、公共空間での安全対策（マスク着用、消毒剤提供、飲食店の座席間の距離確保）は日本の長所。ワクチン情報の不足、マスクなどのパニック買い、緊急事態の線引きがブレ続けたのは短所かな。米国ではワクチンの展開が早く、経済再開のタイムラインが明確でした。④多くの人がマスクを着用し、飲食店が8時に閉店し、映画館がときに営業していない点を除けば、日常生活は以前とさほど変わりません。LAでは外出できず不平をこぼす人もいましたが、私は日本ではそうは感じませんでした。

新領域創成科学研究科修士課程

アメリカ

Destiny Johnson さん



## 日本の打つ手は「接地気」しすぎかも

①昨年4月に入学しましたが、1年間、同級生や先輩と対面で会ったことがほぼなく、大学院に通っている実感がありません。『礼記』の「独学にして友無ければ、則ち孤陋にして聞くこと寡し」の状態です。②日本政府の学生支援緊急給付金の募集が始まった頃、留学生には特に厳しい要件が課されていると一部報道がありましたが、東大の事務から、あきらめて申請を控える学生がいるのではないかと心配だ、ぜひ相談して申請を検討してほしい、という理事の呼びかけのメールが届きました。留学生にそこまで配慮しているのかと感動しました。③うちで会食、巨大イカ像設置……疑問に思う政策が多く、不思議でした。庶民の生活実感を理解して大衆に受ける政策を打つという意味の「接地気」（地に足が着いた感じ）という流行語が中国にあります。日本はある意味で接地気しすぎかも。④コロナ禍なのに、日本では緊急事態宣言でも要請することしかできず、政府の権限の弱さと国民の自由度に驚きました。

中国

総合文化研究科修士課程 鍾周哲さん



## 駒場→本郷の移動がないのは不幸中の幸い

①最も難しいのは、オンライン授業で注意力を維持することです。研究面では、実験系の作業では状況に対応するのに少し時間がかかりましたが、新しいやり方をすればうまく進められそう。思うように旅行できないことを除けば日常生活に大きな影響はありません。授業を受けるのに駒場から本郷に行く必要がないのは不幸中の幸い。②満足です。大学は活動制限に関して厳しすぎとゆるすぎの間でバランスを取っています。キャンパスのフードトラックで美味しいものが食べられないのは残念ですが、ただ、アルバイトしないといけない学生や留学生にとって今の状況は死活問題かもしれません。大学が経済的なサポートを提供しているとは聞いていますが、心配です。③日本とタイは比較になりません。私はタイ政府には非常に不満です（笑）。日本は企業や住民への支援や補償の面が順調に進んでいると思います。ただ、ワクチン接種は遅すぎ。過去に何か問題があったせいで遅れたと聞きますが、本来ならもっと早くできたはず。④

工学系研究科修士課程

タイ

Natthajuks Pholsen さん



## 東大発の安心なオンライン授業システムを

①教職員は同僚、学生と接触しなくてはなりません。外国人の教職員、留学生は帰国の際にPCR検査を受けなくてはならないので、学内で新型コロナウイルスの検査を受けられる体制を作った方が良いかと思っています。②会議や授業のオンライン化が早かったのはよいですが、医療体制や政策などの提言をもっと積極的に行うべきです。Zoomには情報流出の懸念があるので、安心して利用できるオンライン授業システムを開発するとよいと考えます。③日本の水際対策は手ぬるい。台湾では入国者に14日間の隔離を求めて違反には罰金を課す一方、隔離専用ホテルを政府が提供し、移動には防疫タクシーの制度もあります。日本も14日の隔離は求めますが、移動の手配は本人任せ。変異株の流行地からの入国者に6日の隔離を求めるだけなのも疑問です。④出入国への対応が外国人には厳しいのに日本人にはゆるいなど、身内に甘いですね。感染拡大中なのにグループで会食したり、行楽地で遊んだり、マスクを外して雑談したりする人を見かけます。

台湾

東洋文化研究所助教 黄偉修さん



## オンライン学会で海外の研究者から刺激

①留学生の人間関係はたいてい大学生活でつながっているもので、それができなくなったのはきついです。指導教員以外の先生とも会にくくなりました。学内の感染情報が少なく、当初英語での発信が不足していたのは留学生には不安でした。研究に集中できたこと、きらめく発想を持つ海外の研究者にオンライン学会で出会えたことはよかったです。②理学部のルーター貸出に感謝です。先生方から学生の体調を慮る連絡があったのも印象的でした。学外者の入構制限もよかったです。でも、守衛が常に立っているのは大変なので椅子を用意したらいいのに。③感染防止のため外国人との外食を控えよとの指針を出した自治体があると報道で知り、明らかな差別だと思いました。④ワクチン接種率の低さが不思議。私はオリ・パラの期間はずっと家にいるつもりです。⑤論文の査読プロセスが前より大幅に遅くなりました。年限が限られる大学院生には大きなストレスです。学生に対しては、より人情味のあるあたかな雰囲気醸成してほしいです。

理学系研究科博士課程

韓国

HyeJeong Kim さん



## 対応が似ていたインドネシアと日本

①オンライン授業では先生や友達と直接やり取りができず、違和感を覚えました。次第に慣れました。通学に時間を使わなくてよいのは助かりました。特に初期は家で退屈な日々が続きましたが、今はもう慣れたものです。メンタルヘルスのサポートは特に初期に重要だったと思います。②コロナ禍が始まった2020年春、大学の授業が延期されるのか予定通り行われるのかが心配でしたが、東大は学事暦を変更せず授業をオンライン化すると迅速に通知しました。正しい決定でした。また、東大のウェブサイトはCOVID-19に関して有益でした。③日本では非常事態宣言、インドネシアでは大規模な社会的制限でしたが、内容はほぼ同じでした。ロックダウンではなく、公共の場が一時的に閉鎖され、プロトコルの遵守が奨励されました。生産力が低下しても経済が止まらなかった一方、状況を制御できず感染も止まりませんでした。⑤東大の構成員がこの不確実な状況に適応し、大学生活がスムーズに進むことを願っています。

公共政策大学院修士課程

インドネシア

Wahyunindia Rahman さん





# 就任記者会見で展開された 藤井総長&報道陣 質疑応答集



5月17日、伊藤国際学術研究センターにおいて藤井輝夫第31代総長の就任記者会見が行われました。挨拶を述べ、略歴を紹介した藤井総長は、現在検討中の指針「UTokyo Compass」(仮)の内容の一部をスクリーンに投影し、適宜ステージ上を歩きながら所信を説明した後、集まった報道陣との質疑応答を行いました。学内向けライブ中継には入らなかった質疑応答の内容を抽出して掲載します。

**Q: 総長としてのリーダーシップをどのように考えていますか。**

A: 私は、構成員が自由な発想で対話し、自由に意見を言い合える雰囲気作りをリーダーシップをもって進めたい。全体の方向性を決め、構成員の声を聞き、各々がモチベーションをもって活動できるようにする。これが私にとってのリーダーシップです。

**Q: 女子学生比率、執行部の女性割合などについてどう考えていますか。また女子受験者の少なさの改善策を教えてください。**

A: 多様な人たちが集まって議論し、課題解決に取り組むこと自体が重要です。多様な人たちの議論で生み出されるものは、クオリティも共感性もより高くなる。多様な人たちがいればその場自体の価値が高まる。学術でも、高みをめざすなら多様性が不可欠です。女子受験者の少なさについては、女子学生の母校訪問など、いろいろな努力をしてきましたが、なかなか変わりません。今年は過去最高の数字になりましたが、まだまだ足りない。さらに増やせるよう具体策を検討しているところです。披露できる段階になったらお話しします。

**Q: 東大発ベンチャーを1兆円規模にしたいとのこと。その具体策をお聞かせください。**

A: スタートアップはまだグローバルな市場で資金調達する段階に至っていません。born globalで、最初からグローバルを見据えた形でスタートアップが生まれる状況に変えたい。そうすれば自然に資金流入の規模感も大きくなっていくはずです。

**Q: 元総長の濱田純一先生が、コロナ禍は秋入学の最後のチャンスだと話していました。秋入学についてはどうお考えですか。**

A: まず、学部の秋入学は、少人数ですがPEAKというプログラムですでに導入しています。10年ほど前、全学的な検討を経て、学部教育の総合的改革を進めるための4タ

ーム制を始めました。それが定着してきたと理解しています。当時、私も検討に加わり、FLYプログラムを立ち上げました。いわゆるgap yearで、受験勉強を続けてきた学生が一回リセットし、大学で何を学ぶかを考える時期にするという趣旨でした。皆がそうすべきというわけではなく、学びの時間的多様性があつたほうがよいと考えます。



**Q: 対面授業が少ないという意見も聞きます。自身のコロナ感染の経験を踏まえ、学生が納得する授業作りをどのように行いますか。**

A: いくら気をつけていても感染する怖さがあるのが新型コロナウイルス。少しでも具合が悪だと思ったら検査を受けるのが大事です。学生には、なんとか工夫して創造的に対応することが大事だと伝えています。授業を全部対面で行うのは状況的に難しい。対面とオンラインを組み合わせ、どこまでできるかを追求したい。all or nothingではなく、中間を工夫し、本来やりたかったことに少しでも近づけることが大事です。

**Q: 今の学生をどう見えていますか。どのような人材に育てたいですか。**

A: かなりしっかりしていて頼もしく感じます。コロナへの対応もしっかりやっていると思います。興味を持ったことについて本や講義で学ぶだけでなく、なるべく現場に

出て実物に触れてほしい。ビジネスや生産や芸術の現場を体験し、今まで学んだことが通用するのか、何が足りないのかを考えて次の学びにつなげてほしいんです。同じ会社で定年まで働くという従来のリニアモデルが描けない、変化が大きい時代です。学生が社会の現場で経験を積むことは、大学で学ぶ際のモチベーションにもつながります。大学が行っている各種体験型プログラムも活用し、社会と大学の行き来を通じて、学びを結び直してほしいと思います。

**Q: 対話、協創、グローバルは重要ですが、今までもいろいろな方が言いながらなかなか変わりません。どうやって突破しますか。**

A: 大学が社会の中で活動の範囲を広げ、社会とより関わることが大事。社会のために何かをしようというモチベーションの強い若い人たちの背中を押すことが重要です。スタートアップ支援に限らず、社会に出てからさらに学びたいという人、産業構造が変わる中で異分野に踏み出したいという人にも大学が対応する形を作りたい。大学が社会全体の人的資本をよいものに高めていくという考え方が重要になると思います。

**Q: 藤井総長も一員となるCSTI<sup>※</sup>有識者懇談会では日本学術会議の改革も検討します。一連の問題について見解をお願いします。**

A: 学術と社会との関係が問われる状況で、社会から学術にどんな期待が寄せられているのか、期待と信頼に応えるために何をすべきか、しっかり考える必要があります。社会が抱える問題に対し学知を総動員して取り組み、貢献しなければいけません。学術会議がその役割を十分に発揮できるようにするにはどうすべきか、私も議論させていただきます。

緊急事態宣言期間中のため、参加者数を限定し、恒例のぶら下がり取材や懇談会も行いませんでした



※総合科学技術・イノベーション会議

総長ビジョン推進担当の理事に聞く

# 東大の目指すCXとは？

コーポレートトランスフォーメーション

今年度、藤井総長から新執行部に招かれ、総長ビジョン推進(コミュニケーション機能強化、組織能力向上)を担当している岩村理事。グーグルのバイスプレジデントとしてアジア地区のマーケティングを司り、ローソンの社外取締役も務めている本学卒業生の理事に、目指すべきCXの姿、東大のブランドイメージ、教職員の働き方改革、そしてご自身の学生時代についてもお話いただきました。



岩村理事の著書  
『ワーク・スマート』(中央公論新  
社 2017年3月刊)

理事  
岩村水樹



## 「対話」は人生のキーワードの一つ

どんなご縁での執行部入りでしたか。

「あるパネルディスカッションでの私の発言に総長が興味をもたれたのがきっかけのようです。共通の知人を介してお会いした際、「世界の誰もが来なくなる開かれた大学」というビジョンと対話重視の姿勢もお聞きました。対話は私の人生のキーワードでもありとても共感しました。大学経営は未経験の分野であり、重責でもあるので逡巡もありましたが、できる限りのことをしようと思いました」

「日大で准教授をしていた頃から教育が社会にもたらすインパクトの大きさを感じていました。私はグローバルな環境で働くなかで新しいリーダーシップの必要性を感じます。権威や立場の力で導くのではなく、多様な背景を持つ人との対話を通じてともに新しいものを生むというものです。経済や企業のあり方の再定義も必要な時代に、社会や世界の分断といった課題もより大きくなるなか、大学の知を活かすことが重要です。東大のインパクトは特に日本においては大きなものがあります。東大を通じてよりよい社会や世界をつくることに貢献したいです」

理事としての担当を教えてください。

「担当は総長のビジョン推進ですが、特にCXのチームと一緒に仕事をしています。CXは複数のWGに横串を通して東大の可能性を広げるものだと思います。社会の要請に応える仕組みをつくと同時に、すばらしい研究と教育の活動を行っていることをより多くの方々に理解頂く。イノベーションを生み出すカルチャーを醸成する。そうした活動を通じ「世界の誰もが来なくなる大学」へのシフトを進めるのが役割です。あとは東大の新

たなビジョンを浸透させ、イメージを刷新すること。東大のブランドは国内では強く、信頼と尊敬も得ていますが、「開かれた大学」や社会との対話のイメージはこれから作るべきもの。この部分が加わればより共感を得られ、よい影響力を社会に与えられるはず。世界でのブランド力強化にも挑戦したいです」

学外から見ると近寄りたいたか冷たいという印象もあるかと思いますが。

「イメージはまだ優秀な人がいるという点に限定されるかもしれません。東大は何のために存在するのがあまり見えないのも課題だと思います。ミッションやビジョンが理解されて初めて共感が得られます。社会にどう貢献するのかを明確に示すことが大切です。若者の間ではソーシャルマインドが高まっています。「世界の誰もが来なくなる大学」であるためには優秀な人がいるというイメージだけでは足りません。そこを変えたいです」

「誰もが働きやすくなる大学」を目指す上での前提の一つは心理的安全性です。わからないことがあれば聞ける、困ったら助けを求められる、相手と違う意見でも率直に話せる、失敗を恐れない……。これらができていない職場ではイノベーションは生まれにくいとされます」

## 志は大きく、スタートは小さく

理事として2ヵ月。感触はどうですか。

「皆さんオープンマインドで、大学の中を知らない私の話も聞いてくださいます。あと、皆さんの仕事が速い。ただ、忙しすぎるので働き方改革が必要だと思います。業務効率化を進め、新しいことや仕事以外のことに時間を使えるようになればと思います。それにはデジタルをもっと活用することです。文書を共有

して共同で作業するとか、カレンダーを共有するとか。会議では、話の内容を逐次共有文書に書き込み、最後に皆で確認すれば、時間内に議事録作成までできます。ただ、働き方改革は一概にはいきません。「Think big, but start small.」と私はよく言いますが、小さくてもまずどこかで始め、それを広げていくべきです」

ご自身の来し方も教えてください。

「父がドイツ文学の研究者だった関係で、小学5年で渡独しました。複雑な背景をもつ欧州の歴史を学び、異文化の人たちが争いを乗り越えてきたと知り、対話を通じて分断を解決することに興味をもちました。東大では学際的に学ぶことをめざして当時新しくできた相関社会科学科に進学。見田宗介、西部邁、村上泰亮、佐藤誠三郎といった先生方が社会的にもインパクトの強い研究を発信する姿が印象的でした。父の授業に出たこともあります。卒論はハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論について、三島憲一先生の指導を受けて書きました」

「1・2年の頃は藝大生など他大生ともに演劇雑誌の編集に携わりました。旅が好きで、大学時代からこれまでに50カ国近くの国を訪問しました(写真)。コロナが収束したらまた新しい土地を訪れたいです」



著書には「Radically Hopeful」「Work Smart, Live Happy.」「Live, Love, Learn.」など印象的な言葉がたくさん登場します。東大へも一言お願いします。

「あえていえば、Unlock the Potential. でしょうか。CXで可能性を解き放ち、ファンやアドボケートを増やすことで、東大への共感を広げていきたいですね」

# Unlock the Potential.







## 海と希望の学校 in 三陸

第14回

岩手県大槌町にある大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターを舞台に、社会科学研究所とタッグを組んで行う地域連携プロジェクト——海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み——です。4年目を迎えたわれわれの活動や地域の取組みなどを紹介します。

### 地元の魅力を探し始めるきっかけに：「おおつち海の勉強室」オープン

大土直哉

大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター  
助教

2018年度から始まった「海と希望の学校 in 三陸」で、私たちが様々な教育普及活動に取り組んで来たことはこれまで本コラムでもたびたびお伝えして参りました。最近では三鉄をジャックし (no. 1541 / 2020.12.21)、ウインターキャンプを行ない (no. 1543 / 2021.2.19)、岩手日報の連載記事を改訂編集した『さんりく海の勉強室』(no. 1545 / 2021.4.22) は町内の書店で4月の売れ筋書籍となりました。そしてこの春にはもう一つ大きなイベントがありました。センターの海側敷地に「おおつち海の勉強室」が遂に開室したのです。

この「勉強室」はかつて沿岸センターにあった展示室を発展的に復活させたもので、研究者が活動や研究成果を紹介するだけでなく、地域の方との交流（今何かと話題の対話！）を通じて、お互いに海や沿岸域の文化についての知識を深める場所として構想されたものです。ですから我々は、訪れた人に「あなたの地元の海の魅力はこれですよ」とお伝えするというよりは、身近な自然の面白さや日常生活に埋没している地域の魅力を探し始める「きっかけ」を提供したい、と考えています。このような目標・ねらいの達成のために室内には市民参加型の展示や図書閲覧コーナーも作ってみました。このような事情があって博物館でも展示

室でもなく「勉強室」と命名されているのです。

4月18日に行なわれたオープニングイベントには、大槌町長、釜石市長、大槌町議会議長のほか、「海と希望の学校 in 三陸」の提携校である宮古市立重茂中学校 (no. 1537 / 2020.8.25) や「はま研究会」の活動が活発化してきた県立大槌高校 (no. 1539 / 2020.10.26) の生徒なども含めて50名以上をご招待し、展示室の活動趣旨や展示内容についてご案内しました。東大基金を通じてご寄付をいただいた皆様には、Zoomを使ってイベントの様様を生配信しました。小さな町の小さな海岸にマスコミ10社が駆けつけ、このイベントの様子は後日、テレビや新聞で様々に報道されました——。このように書くといかに盛大にイベントを行なったように思えるのですが、実際には3密を避けるために、事前に10名前後の4グループを作り、時間差をつけて1グループずつご招待し、30分程度の展示解説ツアーを順番に行なう、という、華々しくも実にこぢんまりとしたイベントでした。

このオープニングイベント以降、勉強室は週1、2日の開室予定日をホームペ

ージとSNSで周知し、電話で予約を受け付け、当日は解説員が同伴する形で開室しています。執筆時点までに大槌・釜石を中心に、いわき市から盛岡まで40名以上の利用がありました。そのすべてがほぼ貸し切り。コロナ禍の影響で図らずも当初の想定以上の「対話」の機会が生まれています。解説員を担当したスタッフは利用者との「対話」からいろいろな刺激を受けているようですが、それはまた別の機会に。



ージとSNSで周知し、電話で予約を受け付け、当日は解説員が同伴する形で開室しています。執筆時点までに大槌・釜石を中心に、いわき市から盛岡まで40名以上の利用がありました。そのすべてがほぼ貸し切り。コロナ禍の影響で図らずも当初の想定以上の「対話」の機会が生まれています。解説員を担当したスタッフは利用者との「対話」からいろいろな刺激を受けているようですが、それはまた別の機会に。



勉強室の見学予約は0193-42-5611から。なお展示室内の様子は、YouTubeの「東京大学・海と希望の学校 in 三陸」公式チャンネルより視聴可能です。

<https://youtu.be/WzDpABob8vs>



「赤浜の船着場の青い建物」で通じる特徴のある外観。壁面のイラストは、沿岸センターの研究者であり、プロのイラストレーターでもあるきのしたひろさんによるもの



メイン展示室は標本展示のほかにも図書閲覧コーナー（奥）やタッチパネル式の生き物図鑑（左）などを備えた、生物好きには夢のような空間



昨夏には中学生数名を準備中の勉強室に案内した。彼らとの「対話」を通して展示棚の高さを納入時より2段階下げることにした

「海と希望の学校 in 三陸」動画を公開中→ YouTube サイトで「海と希望」と検索！

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）





## シリーズ 第35回 連携研究機構

災害・復興知  
連携研究機構

の巻



話／機構長  
目黒公郎先生

### 防災対策をコストからバリューへ

——長年の活動を元に生まれた機構だそうですね。

「東大内での防災研究者の連携は、以前はあまりありませんでした。災害情報研究の第一人者だった情報学環の廣井脩先生は連携の重要性を訴えておられましたが、惜しくも2006年に逝去されました。その遺志を継ぐ形で、学環、地震研、生研が連携して2008年に設立したのが総合防災情報研究センター（CIDIR）で、その際センターのミッションをまとめたのが私でした」

——CIDIRの読み方は「シーディアル」ですか？

「いえ、3部局の連携→三本の矢→三ツ矢「サイダー」です。本機構は、10年以上のCIDIRの活動を軸に、災害や防災の知、復興の知の集積と連携研究の実施を目的に、今年2月に発足しました。学理の探究と実学の構築の両面から、防災に関する連携研究と教育プログラム構築をオール東大で進めます。対象災害は首都直下地震、南海トラフ巨大地震、大規模噴火、大規模水害、福島復興などです。学環、地震研、生研に、医学部附属病院、工学系研究科、農学生命科学研究科、アイソトープセンターが加わり、現在約30人の教員が参画しています。この人数と分野数を有する防災研究組織は世界的にも貴重です」

——災害に強い建物の研究を進めるのでしょうか。

「ハード対策は当然重要ですが、実際に災害に強い環境を実現するには、社会システム、法律、教育といったソフトも不可欠です。例えば、建物の耐震補強では、まず耐震性の評価が必要で、これはソフト対策です。耐震工事を促す制度も重要で、これを実現するには経済学や法学などの知見も必要です。効果的な防災対策の実現には多様なディシプリンが必要で、だからこそ多分野の連携が必要なのです」

——日本の防災は国際的に見るとどうですか。

「研究も実際の対策も非常に高いレベルです。しかし、日本が対峙するハザード<sup>\*</sup>は他国と比べて強大なので、無被害やゼロリスクは無理です。それでもハザードの規模の割には被害を大幅に抑え込んできましたが、国際的な認知度は低い。主な理由は文系の防災研究者や行政による英語での成果発表が少ないからです」

「防災をサステナブルなものにするには、論文執筆のみならず、防災の産業化と国内外の防災ビジネスの魅力的な市場形成が肝要です。そのためには、コストではなくバリュー（価値）と考える防災対策、平時の生活の質の向上を主目的とし、災害時にもそのまま有効活用できるフェーズフリーな防災対策への意識改革が必要です。これらの意識を大切にしながら、機構の活動を展開したいと思います」

## UTokyo 第26回 バリアフリー最前線！

バリアフリー支援室准教授

切原賢治



### 発達障害・精神障害のある方の支援

大学などの高等教育機関における障害学生数は年々増加していますが、なかでも近年顕著に増加しているのが発達障害と精神障害です。東京大学も例外ではなく、バリアフリー支援室で支援している学生には発達障害や精神障害のある方が多くいます。もっとも、精神疾患の患者数は400万人を超えており、30人に1人は精神疾患を有していること、発達障害は生来的な特性でもあること、他の精神疾患も若くして発症することが多いことから、支援が届いていない発達障害や精神障害のある学生もまだ多くいるのではないかと思います。

発達障害や精神障害のある方にとって、支援を求めることは簡単なことではありません。疾患にもよりますが、自身の病状に気づくことに困難があったり、気づいてもコミュニケーションが苦手でうまく支援を求められなかったりすることが多いです。また、精神症状の多くは主観的な体験であり、周囲の人にとっては理解しづらく、誤解や偏見を生みやすいです。そのため周囲に精神疾患を知られることに不安があったり、自分自身で精神疾患を受け入れることに困難を感じたりすることも多いです。こうした方々に支援を届けるには困難に気づく周囲の目が必要になります。昨今はコロナ禍でオンライン授業が一般的になりました。発達障害や精神障害のある学生にとってオンライン授業は負担が少なく参加しやすいという方もいる一方で、オンライン授業では参加に困難を感じる学生もいます。後者の中には困っているのに支援を求められない方もいると思われますが、周囲の目が届きにくい状況であるため心配な点です。

うまく支援につながることができたら、授業や試験に際して合理的配慮を調整します。合理的配慮であるためには教育の本質を変更しないことが求められます。しかし、発達障害や精神障害では認知やコミュニケーションなどの能力に制限があることが多く、支援が教育の本質を変更するか否かの判断は難しいことが多いです。こうした判断はバリアフリー支援室だけでは困難であり、教員の先生方のご協力が欠かせません。

以上示してきましたように、発達障害や精神障害のある学生は増加しており、支援の必要性は増しているのですが、具体的な支援についてはまだ発展途上にあります。学生に関わる多くの教職員の方々の協力を得ながら、発達障害や精神障害のある学生にとってもバリアフリーな東京大学の実現に向かっていきたいと考えています。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

<sup>\*</sup>被害を引き起こす自然の脅威



## ワタシのオシゴト 第181回

RELAY COLUMN

医学部附属病院  
人事労務課人事チーム

泊 武伸

## コロナの収束を願って



ワクチン接種会場で準備中

中学野球部の先輩である同期（←前月参照）から指名され、締め切りが迫ってきてやっと思書になったそんな今日この頃です。私の所属は病院の人事チームですが、4月からは「新型コロナ対策本部事務局」での仕事が主な業務となっています。医療従事者向けワクチン接種の運営やコロナ患者の転院支援、東京都や厚生労働省への調査報告など連日ニュースで報道されているような医療現場と密に関わる仕事はとても貴重な経験であると感じています。

プライベート面では、コロナ禍前は平日昼休みに御殿下グラウンドで、休日は職場のチームでフットサルをしていました。フットサル中は仕事のことも忘れることができるまさに憩いの時間です。コロナが収束し、また気兼ねなくフットサルができる日がくることを切に願っています（下写真は野球立ち見の図です。野球も好きです笑）。



亀井義行で日本シリーズ観戦

得意ワザ：スライディングキャッチ（野球）  
自分の性格：面倒くさがりだが、責任感強い  
次回執筆者のご指名：佐伯 勇さん  
次回執筆者との関係：昼休みフットサル仲間  
次回執筆者の紹介：フレンドリーな方です！

## デジタル万華鏡

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう



第24回

数理科学研究科准教授

三枝 洋一

## 大数学者の筆跡

東京大学大学院数理科学研究科図書室では、高木貞治先生の自筆ノートを所蔵しています。高木先生の専門は整数論であり、日本最初の世界的な数学者といわれています。特に、高木先生の打ち立てた類体論は、代数的整数論の一つの到達

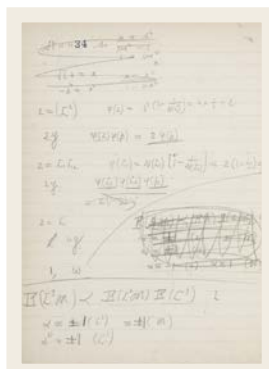


行列式についての講義ノート

点に位置付けられ、現在の数理科学研究科における研究にも深く影響を与えています。

高木先生が東京帝国大学教授としてご活躍された1904年から1936年の間、整数論の中心はドイツにあり、それゆえ、大部分のノートはドイツ語で書かれています。とはいえ、数式はある意味共通言語ですので、ドイツ語が読めなくても、数式を眺めるだけで様々な想像を巡らせることができます。英語で書かれているものには、行列式（今でいう線型代数）についての講義ノートや、初等整数論と代数方程式論の講義ノートがあります。前者は、現在でも学部1年生で学ぶような内容が書かれており、数学の普遍性を感じさせてくれます。また、後者からは、高木先生の著書『初等整数論講義』『代数学講義』が思い起こされます。この2冊の名著を片手にノートをご覧になると、より楽しめるかもしれません。これらの講義ノートは、いずれも丁寧な筆致で書かれており、几帳面なお人柄がうかがえます。その一方で、計算ノート「Complex multiplication」には、雑然と並んだ計算式が見られ、大数学者の迫力の一端を垣間見ることができます。

高木先生の自筆ノートは画像がデジタル化されており、ウェブ上での閲覧が可能です。この機会にぜひご覧になり、偉大な数学者の在りし日の姿に思いを馳せていただけたらと思います。



様々な計算式が並ぶノート「Complex multiplication」

<https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/takagi/page/home>



# インタープリターズ・第166回 バイブル

科学技術インタープリター養成部門  
特任准教授

定松 淳

## 化学愛と化学物質過敏症

3月に今年は8名の受講生がプログラムを修了した。今回はそのなかの1人、F君のことを話したい。

F君は工学部で化学を専攻しており、その化学愛は同期のなかでも際立っていた。当プログラムでは受講開始のセメスターに分野横断的なディスカッションを行う必修のゼミを受講するのだが、そのなかでも化学反応について説明するときの彼の知識の豊富さには何度か驚かされた。あるいは私が担当する授業で水俣病の歴史を紹介し、西村肇先生のメチル水銀生成メカニズムについての研究を紹介したところ、少し違う反応経路がある可能性を提案してくれたこともあった（ハンスディーカー反応を挟んでいるのではとのこと）。

そんな彼が「副専攻の修了研究」で選択したテーマはchemophobia。言うまでもなく、「化学物質」というだけでネガティブなイメージを持たれることがある現状に対する問題意識があった。当初、ロボット研究における「不気味の谷」のアナロジーを用いたりして議論していたことを覚えている。しかし具体的に研究を進めるために、一般市民がもつイメージとしてのchemophobiaではなく、ハードケースとしていわゆる化学物質過敏症を取り上げてみるようになった。そして、いきなり患者さんと接するのは大変だろうということで、この問題に取り組む専門家にインタビューしてはどうかと、北里大学名誉教授の宮田幹夫先生にインタビューすることになった。

最初のインタビューでF君は、症状についての解説や患者さんの心情についてお話を伺ってきたのだが、それ以上に彼がインパクトを受けていたのは、宮田先生の個人史であった。宮田先生ご自身が当初は過敏症の存在を信じていなかったこと、苦勞が多いであろうことを予期しながらそれでもこの問題にコミットするようになっていかれたこと、そのことを少し自己諷刺も含めながら話されたこと。化学を必ずしも否定的に捉えておられなかったこと。そういった二項対立的ではない体験談が、F君自身がchemophobiaや過敏症の方々との間に感じていた距離感を溶解させたのだった。

もう一度、今度は宮田先生の個人史に焦点を当ててインタビューを行い、F君はその線で修了研究をまとめてくれた。プログラムのウェブサイト上でPDFが公開されているので、ご関心がおありの方は是非ご覧いただきたい。

[http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2021/03/2020\\_09\\_FUNAMI.rev\\_.pdf](http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2021/03/2020_09_FUNAMI.rev_.pdf)

科学技術インタープリター養成プログラム  
[science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp](http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp)

# 蔵出し! The University of Tokyo Archives 文書館 ぶんしよかん



第32回

収蔵する貴重な学内資料から  
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

## 記念日は3月1日だった?

東京大学は、明治10（1877）年4月12日、東京開成学校と東京医学校を合併して創設され、この日を東京大学記念日としていますが、3月1日としていた時期があったことはご存じでしょうか。

明治18（1885）年、大学記念日設定に関する原案が出され、その年の12月に現在と同じ4月12日に決定されました。しかし、年が明けた明治19年3月1日「帝国大学令」が制定（3月2日公布）、東京大学は帝国大学に改組されたことにより、同年4月5日「自今本学記念日ヲ三月一日トス 但旧東京大学記念日ハ消滅シタル儀ト心得ヘシ」（『各分科大学往復 明治十九年分』S0005/16）として改められました。再び現在の日付に戻されるのは昭和11年2月を待つこととなります。

第1回の記念日祝賀式は、明治20（1887）年3月1日「帝国大学令公布記念日」（大正8年の帝国大学令改正により、大正9年より「東京帝国大学記念日」と改称）として実施されました。祝賀式は時代によって多少内容が異なりますが、式典の後には教職員や学生等の出席者に茶菓が振る舞われました。『帝国大学令公布記念日関係 自明治二十年至明治四十五年』（S0010/0007）の中に明治45（1912）年に行われた際の茶菓等の配置図があります。当時の職員の遊び心でしょうか。机の形に切り取られた図には赤飯やお茶菓子などが1卓100人分、全部で10卓1,000人分の茶菓が用意されました。

さて、机に並べられている「空也餅（空や餅）」。夏目漱石の小説『吾輩は猫である』に出てくるあのお菓子でしょうか？お店の公式ウェブサイトによると「夏目漱石が好んだ「空也餅」はあんこ玉をもち米でくるんだお菓子」とありました。この「空也餅」、配置図と一緒に綴じられていた資料によると4,000個、一人当たり4個の計算で準備されたようです。残念ながら夏目漱石が学生や講師だった頃の資料には何が供されていたかについて確認できませんでしたが、もし夏目漱石がこの祝宴に参加していたら、「空也餅」を頬張りながら会話に興じていたのかもしれない。

（主事員 村上 すすえ）

参考：ぎんざ空也 空いろ 公式ウェブサイト：<http://sorairo-kuya.jp>、『東京大学百年史』通史1、2

東京大学文書館

**トピックス** 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

| 掲載日        | 担当部署・部局                   | タイトル（一部省略している場合があります）                                                                   |
|------------|---------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| 5月12日      | 先端科学技術研究センター              | 先端アートデザイン分野開設記念シンポジウムを開催                                                                |
| 5月17日      | 本部広報課                     | 令和3年春の紫綬褒章受章                                                                            |
| 5月17日      | 本部広報課                     | 藤井輝夫総長の就任記者会見を開催                                                                        |
| 5月18日～6月1日 | 本部広報課                     | サイエンスへの招待:「ネット右翼」は弱者ではなかった、サイエンスへの招待:ロボットを創ることによって人を知る、部局を代表する研究者100人の直筆格言集   「淡青」42号より |
| 5月21日      | 大学総合教育研究センター              | UTokyo OCW (OpenCourseWare) ウェブサイトリニューアルのお知らせ                                           |
| 5月28日      | 宇宙線研究所                    | ハイパーカミオカンデの着工記念式典を開催                                                                    |
| 5月28日      | 広報戦略本部 理学系研究科・理学部         | 熱化学電池で見据えるグリーンな化学                                                                       |
| 6月1日       | 本部広報課                     | 東京大学の論文シェアが8位に                                                                          |
| 6月1日       | 本部学生支援課                   | 陸上運動部内山選手が関東学生陸上競技対校選手権大会で優勝                                                            |
| 6月1日       | 史料編纂所                     | 史料編纂所ウェブサイトリニューアルのお知らせ                                                                  |
| 6月8日       | グローバルキャンパス推進本部<br>本部国際戦略課 | 令和3年東京大学・フランス国立科学研究センター共同研究の実施                                                          |
| 6月9日       | 広報戦略本部                    | IoT時代の無線技術を開発   Entrepreneurs 07                                                        |
| 6月10日      | 本部保全課                     | 「赤門オンライン見学会」YouTube/東大TV公開のお知らせ                                                         |
| 6月10日      | 本部協創課                     | 日本IBM及び川崎市と量子コンピューティング技術の普及と発展に関する基本協定を締結                                               |



## CLOSE UP

### 内山選手が関東インカレの女子三段跳で優勝！

（本部学生支援課）



中央が内山選手（本誌1529号にインタビューあり）。おめでとうございます！



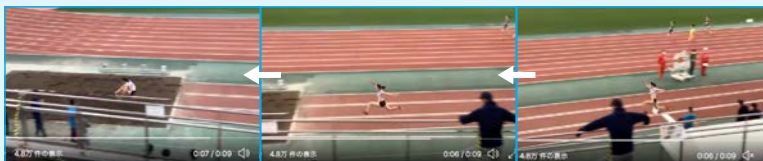
5月20日～23日に開催された第100回関東学生陸上競技対校選手権大会（関東インカレ）において、本学運動会陸上運動部の内山咲良選手（医学部・6年）が女子三段跳に出場し、12m86cm（追い風2.0m）の記録を打ち出して見事優勝しました。本大会は大学における陸上競技の関東一を決める大会です。本学学部生が本大会で優勝するのは昭和4年（1929年）以来であり、女子学部生としては史上初の快挙となります。

本学では新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐ観点から、昨年度から課外活動を原則自粛とし、健康管理や感染予防体制の徹底等を条件に活動再開を行っています。このような中での快挙は、限られた練習機会と今ある環境を最大限に生かし、他部員と共に切磋琢磨を続けてきたことの成果と言えるでしょう。

#### 【内山選手のコメント】

「5月20日から23日にかけて行われた関東インカレの女子三段跳で、12m86cmの記録で優勝することができました。強い選手が揃っており、誰が頭一つ抜けた記録を出しても不思議ではない状況ではありましたが、そういった中で自分が試合に競り勝つことができ、またセカンドベストを出すことができたので、勝負面でも記録面でも充実した試合にできたと思っております。こういった状況の中でも出られる試合があることに感謝し、次の試合でもっと良い記録を残せるように練習して参ります」

陸上運動部は一昨年度改修された駒場キャンパス第1グラウンドを本拠に、日夜練習に取り組んでいます。内山選手を始め、陸上運動部員の活躍に今後ご期待ください！



優勝を決めた大跳躍はこちら（撮影：総合文化研究科修士2年・村井輝さん）

## 春の紫綬褒章受章

水島 昇教授（医学系研究科・医学部）、加藤隆史教授（工学系研究科・工学部）、佐藤 薫教授（理学系研究科・理学部）、福田慎一教授（経済学研究科・経済学部）、長木誠司教授（総合文化研究科・教養学

部）が、令和3年春の紫綬褒章を受章しました。おめでとうございます。ゆかりの深い先生方が執筆した紹介記事については、全学ウェブサイトの「各賞受賞一覧」のページからご覧ください。





## CLOSE UP

### 先端アートデザイン分野開設記念シンポジウムを開催

（先端科学技術  
研究センター）



第2部のRCAST-AADコンサート



AADのシンボルはデザイナーでもある伊藤志信特任准教授によるもの

4月28日、先端科学技術研究センターにて「先端アートデザイン分野開設記念シンポジウム ～インクルーシブな持続的社會を実現する Nature-Centered（自然主義）の視座とは～」をオンライン開催し、一般も含め250名以上の方々に参加いただきました。

シンポジウムの冒頭では、藤井輝夫総長より、研究者と多様なアーティストとの対話を通して、先端研ならではの新たな価値の創造への期待を込めた開会挨拶がありました。澤和樹東京藝術大学長、岡部徹生産技術研究所所長、五神真前総長による来賓祝辞をいただいた後、5名の教員が先端アートデザイン分野（AAD）の説明を行いました。

第2部では、RCAST-AADコンサートを開催し、ピアニストでAADアドバイザーの辻

井伸行氏、澤東京藝術大学長と、連携協定機関である東京フィルハーモニー交響楽団のメンバー及び近藤薫特任教授らによる演奏が行われました。

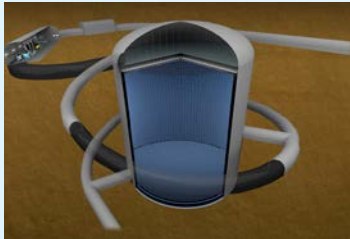
第3部では、先端アートデザイン連携研究部門の産学連携のパートナーである10企業の代表者所信表明を行い、参加の意気込みや、研究部門への期待が語られました。最後に先端アートデザイン分野の研究総括である神崎亮平先端科学技術研究センター所長が「先端アートデザインは、多様な人々によって作り上げられていく分野であると考えている。ぜひ多くの皆様、アート、デザイン、科学技術、そして哲学宗教、様々な分野の皆さんと手を携えて、新しい世界、これからの未来をぜひ築き上げていきたい」と締めくくりました。



## CLOSE UP

### ハイパーカミオカンデの着工記念式典を開催

（宇宙線研究所）



ハイパーカミオカンデのイメージ図

ハイパーカミオカンデの着工記念式典が5月28日、岐阜県飛騨市神岡町の建設現場で行われました。政府の緊急事態宣言が9都府県に出される中での開催で、リモートも含め約50人が参加しました。ハイパーカミオカンデは、スーパーカミオカンデの約8倍の有効質量を持つ巨大水タンクと超高感度光センサーからなる実験装置で、陽子崩壊の発見やニュートリノのCP対称性の破れ（ニュートリノ・反ニュートリノの性質の違い）の発見、超新星爆発ニュートリノの観測などを通し、素粒子の統一理論や宇宙の進化史の解明を目指します。同事業は2020年2月に予算が成立して正式にスタートし、地下空洞の掘削に向

けた地質調査や新型光センサーの製造などを進めてきました。

式典は、5月6日に掘削が開始されたアクセストンネルの入り口付近で行われ、藤井輝夫総長による挨拶や来賓からの祝辞に続き、ハイパーカミオカンデコラボレーションの共同代表でもある宇宙線研究所の塩澤真人教授が計画概要を説明。オンライン参加の関係者・来賓がモニター上で見守る中、現地で参加した6人が鍬入れの儀を行いました。

今後、新型光センサーの製造と並行して、トンネルや空洞の掘削やタンク建設、光センサーの取り付けなどを進め、2027年の実験開始を目指します。

# コロナ禍 vs 東大 Now

新型コロナウイルス情報WG発

## 第7回／「学びを止めるな！」修学のための緊急学生支援

2020年春、中国から世界に拡散したコロナ禍は、大学の研究・教育活動だけでなく、構成員一人一人の生活や健康も脅かしました。全国で急浮上したのは、親元の家計の急変や本人のアルバイト収入の激減による、学生の経済的環境の急激な悪化です。修学難は、およそ2万8000人もの学生を抱える東京大学にとっても焦眉の課題となりました。

そこで本学は、5月15日に大学独自の「緊急学生支援パッケージ」を打ち出し、コロナ禍で経済的に修学困難に陥った学生に対して5万円の緊急給付を実施しました。7月末までにほぼ給付を完了、受給者は総数2352名、支給総額は1億1760万円に上りました。原資

は約2/3が学内予算、1/3が東京大学の修学支援事業基金への寄付で賄われました。

同じ時期、政府も大学推薦に基づいて支給する「『学びの継続』のための学生支援緊急給付金」を創設しており、こちらには2196名を推薦しました。この給付をめぐるのは、留学生には特別厳しい条件が課されるという報道も流れていたため、6月3日には、諦めず資格を確認して申請するよう促す大久保達也理事のメッセージも発出しています。

授業料免除についても、通常の申請期間終了後に家計が急変した学生に対して、急遽申請期間を設定して受け付けました。昨年度コロナ禍の影響で授業料免除を受けた学生は

### 「東京大学緊急学生支援パッケージ」

1. 緊急給付型奨学金の支給（5万円）
2. 緊急授業料減免の実施
3. 授業料納付期限の延長（2ヶ月）

73名に上ります。また、自宅外通学の女子学生に給付する東京大学さつき会奨学金にも19名が採用されました。

最前線で奮闘したのは、学生支援担当の職員です。勤務にも制約が多い中、通常業務に加えてこれだけの緊急対応を短期間にこなしたのです。励みとなったのは、給付を受けた学生から届く感謝のメールでした。

部局独自の施策も含めれば、さらに多くの学生が何らかの形で緊急の支援を受けた今回のコロナ禍。日々の学業・研究が多くの方々に支えられていることを実感します。

（杉山清彦／総合文化研究科・広報室副室長）



## 政策と当時の知識

今回のコロナ禍による経済活動の落ち込みとよく比較されるのは1930年代の「大恐慌」であり、20世紀最大の不況だ。大恐慌は中学や高校の社会の教科書でも紹介されている。アメリカの株価暴落のエピソードがよく知られているが、金融政策の失敗が多くの国の不況を深刻化させたことはあまり紹介されていないように思われる。当時の政策当局者が失敗したくて失敗したわけではないことは容易に想像できる。現在の知識では、当時の国際金融の枠組みである金本位制に欠陥があったことが理解されている。しかし、当時の政策当局者の多くは、当時の政策枠組みが正統的なものだと思っていたようだ。

現在の日本の状況からは想像が難しいかもしれないが、1970年代には日本を含めた多くの先進国で高すぎる物価上昇率（インフレ）が問題になった。これについても、現在の知識では、当時の金融政策が高インフレの要因となっていたことが理解されている。しかし、大恐慌時の政策当局者と同様、70年代の政策当局者が失敗したくて失敗したわけではな

い。当時の政策当局者が持っていた知識や当時の経済学の水準は、現代のものと必ずしも同じではない。

私はその時代時代の政策当局者を擁護するつもりでこの文章を書いているわけではない。しかし、今現在の重要な政策問題を我々が考えるときには、我々の意思決定は今現在持っている知識や学問水準に縛られている。それらは限られているものであり、後世の知識や学問水準からみると間違っていると判断される可能性があるということは、常に意識する価値があるのではないか。このことは経済の分野に限らないと思う。知らないことに対して謙虚であることはもちろん、自分が知っていると思っていることに対しても謙虚である必要がある。現在の我々教員が知っていると思っていることが正しいかどうかは、現在の学生の世代が判断することになるだろう。

青木浩介  
(経済学研究科)

